

# 12 News Letter

巻頭言  
2023年度大会  
学生参加報告  
優秀発表賞報告  
受賞コメント

特集  
AIと文献検索  
ChatGPTと大学

2024. Apr.

動物の行動と管理学会

## 巻頭言 副会長挨拶

竹田 謙一 (信州大学)

新年度を迎え、皆様、慌ただしい日々をお過ごしのことと思います。この3月に大学を卒業、大学院を修了された皆さん、おめでとうございます。研究を続けられる方もいらっしゃる、新たな分野で仕事に就かれる方など、その進路も多様かと思えます。次のステージでも、皆さんが光り輝くことを期待しております。



さて、令和5年度から6年度にかけて、本学会に関係する大きな動きがいくつか見られました。①前号ニュースレターでも青山会長から紹介されているところですが、動物行動図説の大幅な見直しが行われ、先日「改訂版動物行動図説」が出版されました。近代科学は分類することから始まると言われます。動物の行動を客観的に捉え、それを数値化するためには、明確な行動の定義づけが必要です。古今東西、行動事典というものは存在していましたが、写真付きで行動の定義を説明し、かつ、分析方法についても解説している教科書は、他に類を見ません。ぜひ手に取っていただき、日々の研究活動に役立てていただければと思います。②次に昨年7月に農林水産省からアニマルウェルフェアに関する飼養管理指針が畜種ごとに公表されました。残念ながら、各指針の正式名称は「〇〇(畜種名)の飼養管理に関する技術的な指針」と表現され、アニマルウェルフェアという用語は見られません。それでも、日本にとっては大きな一歩となりました。来年開催される大阪万博では、畜産物の食材調達コードに上記指針の順守が求められています。3年前に開催された東京オリンピック、パラリンピック大会でも同様の調達コードが示されてきましたが、選手村での提供に限定された同大会に比べて、大阪万博では出店飲食店数、来場者ともに、大規模になることでしょう。益々、アニマルウェルフェアに対する社会的要請が強まると考えられます。③事実、OECD(経済協力開発機構)では、責任あるビジネス行動に関する多国籍企業のための指針を改定し、環境の章にアニマルウェルフェアに関する事項が盛り込まれ、「企業は、世界獣疫事務局(WOAH、旧国際獣疫事務所 OIE)の地上法規に沿った動物福祉基準を尊重する必要がある。」と示されました。いくつかのグローバル食品企業がアニマルウェルフェア対応畜産物を利用すると宣言した目標年の2025年が迫る中、今年には大きな変化があるかもしれませんね。④このようなアニマルウェルフェア対応は、「5つの自由(Five freedoms)」の視点から総合評価しようと国際的にも認知されてきたところです。しかし、既に多くの動物園では「5つの領域(Five domains)」の視点で捉えられてきました。今年開催されるWOAHの総会では、陸生動物衛生規約のアニマルウェルフェア基本原則を示している第7章に「5つの領域」を記載することが議論されるようです。

このように世界はめまぐるしく変化しています。先にも述べたように日本も農林水産省の指針として、アニマルウェルフェアへの取り組みが明らかになっているわけですが、国際的評価は相変わらず低いようです。その一番の原因は法整備の無さと言われています。指針の公表だけではダメなのでしょうか？ 実は日本の「動物の愛護及び管理に関する法律」の英語表記は、「The Act on Welfare and Management of Animals」で、ウェルフェアの表記があります(愛護をウェルフェアと言い換えている点の議論はこの際、抜きにして)。北海道大学One Healthリサーチセンターの大谷博士の見方によれば、動物をsentient beingsとして位置付けているか否かも、大きなポイントだと言います。日本の法律では、「動物が命あるものであることに鑑み、・・・」となっています。欧米の人たちにも、「動物の命」を大切にする日本の考え方に想いを馳せて欲しいですね。

いずれにしても、本学会も社会に向けてプレゼンスを高める必要があります。活発なご議論と大会への参加を宜しくお願い申し上げます。

## 2023年度大会 学生参加報告

### 門田 優人 (茨城大学大学院)

昨年、9月14～15日に開催された2023年度大会において私は、口頭発表(優秀発表賞対象)をさせていただきました。2022年度も参加しましたが発表はしなかったため、今回はまた違った緊張感を持ちながらの参加となりました。

私の発表テーマは「サシバエの吸血飛来反応に対するシマウマと家畜馬の忌避行動評価」でした。サシバエが飛来し動物の体に付着した際の、シマウマと家畜馬の忌避行動の違いを明らかにすることを目的とする研究であり、これまで、日立市かみね動物園や千葉市動物公園を中心に調査・研究をしてきています。

実は私は学部では無機化学系を専攻しており、全く異なる分野での研究は大きな挑戦であり、天候に左右されるなど生き物相手のフィールドワークに日々悩みながら進めています。2022年は諸事情により研究の一部を断念するなど困難もありましたが、その中でも、小針先生の指導の下、研究室の先輩、後輩からの助言、援助により、また、お忙しい中丁寧な調査に協力をいただいた飼育員の皆様のおかげで、今回研究発表をする機会を得ることができました。発表では、今自分にできることはすべて果たせたと感じ、満足しています。しかし、私の発表に対する質問・意見や、他の方の発表を聞く中で、自分に未熟な点がまだまだたくさんあることを痛感しました。今後はさらに研鑽を積み、より分かりやすく、充実した発表をできるよう努力していきたいと思っております。

2023年は研究をより深めるためフィールドを広げ、豊橋総合動植物公園や多摩動物公園でも調査を行っておりますが、本大会では担当の飼育員の方が会場まで発表を聞きに来てくださり、とても嬉しく励みになりました。修士論文においては、付着するハエの数や忌避行動特性の違いだけでなく、休息する頻度やストレスの影響についても明らかにしていきたいと考えています。最終的には、また動物園での発表を行うことなどで恩返しできればと思います。

最後になりましたが、2023年度大会の開催にあたり、素晴らしい運営に携われた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



## 2023年度大会 優秀発表賞報告

### 田辺 智樹 (大会担当・北海道立総合研究機構酪農試験場)

優秀発表表彰は口頭発表の学生会員を対象とし、今大会では20題のエントリーがありました。今大会は対面開催(一部配信)での実施となり、ようやくこれまでと同様の対面での研究発表会を行うことができました。大会参加登録者のうち100名前後が対面で参加していただき、以前のような会場での活発な質疑応答もみられ、発表した学生にとっては良い経験になったのではないのでしょうか。優秀発表へのエントリー数は昨年の2倍以上、演題内容は動物園動物、家畜、昆虫とバラエティに富んでおり、どの演題もスライドや説明に工夫がなされていてとてもわかりやすい発表でした。個人的には、若手(学生)の研究者が発表中の質疑応答だけでなく会場外でも活発に交流していたことが印象的でした。この学会で築いた若手どうしのつながりはこの先も大切にしてもらいたいと思います。次回は熊本での開催予定です(NLにもしっかり書いておきましょうね)。今大会に引き続き次大会でも学生会員の皆様には積極的に優秀発表にエントリーしていただけることを期待しています。

最後に、お忙しいなか審査員を引き受けていただいた先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



※優秀発表書受賞者およびコメントは次ページ  
※大会開催時の所属を表記しています

厳正なる審査の結果、以下3名の方を今大会の優秀発表者として決定いたしました。

野崎 ののこさん(東京農工大院農)  
「飼育システムの違いが採卵鶏に与える影響の分子生物学的理解」

榎屋 百恵さん(岐阜大院連農)  
「飼育下アジアゾウの移動継続時間と歩行の特徴」

但 申さん(東北大院農)  
「黒毛和種肥育牛の横臥中姿勢の種類とその遷移」

## 優秀発表賞 受賞コメント

### 野崎 ののこ (東京農工大院農)

2023年度大会において、優秀発表賞という素晴らしい賞をいただき非常に光栄です。学会を開催していただいた関係者の方々、ならびに研究の遂行に携わっていただいた方々、そして日頃熱い指導をしてくださる新村毅先生にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。

本大会では、飼育システムの違いが採卵鶏に与える影響について、マルチオミクス解析により得られた新たな知見を紹介させていただきました。本研究は膨大なデータを得ることが出来ます、その分、データの統合的な解釈が非常に難しく、約3年間研究しているのにも関わらず未だに手探り状態です。このような状況下で、優秀発表賞をいただけたことは大きな自信に繋がりました。

一方で、受賞の大きな要因は研究内容の新規性や面白さであると考えています。本研究をそれだけのものに終わらせないよう、また、本研究を超えられるようなものを生み出せるよう、今まで以上に精進してまいります。



### 榎屋 百恵 (岐阜大院連農)

このたびの受賞、大変嬉しく思っています。日頃から指導してくださっている二宮茂先生はじめ、先輩や研究室の仲間、調査時にお世話になった東山動物園の職員の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、口頭発表後には(懇親会も含め)たくさんの方から質問や助言をいただきました。ディスカッションを通して行動観察の視点や分析方法などを学ぶことができたことはもちろんですが、自分の研究について広く興味を持ってもらえたことも嬉しく感じました。発表の準備は大変でしたが、このような学会の楽しさ・醍醐味のようなものを今大会で強く感じることができ、ここで口頭発表して良かったなと思いました。これからも研究を進めて次の成果を発表できるよう励んでいきますので、ご教授いただけますと幸いです。



※受賞時の所属を表記しています

※但申さんは連絡の都合上、掲載できませんでした。申し訳ありませんでした。

次号以降での掲載も検討いたします。

# 特集

## AIと文献検索

安家 叶子 (公益社団法人 地球環境戦略研究機関)

学術研究において、文献検索は先行研究という膨大なデータベースから有用な研究を見つけ出す時間のかかるプロセスです。またこのプロセスは、研究の質に直接影響を及ぼすため、とても重要です。そのプロセスのサポート役として、近年はAIや便利なデジタルツールが多く開発されており、多忙な研究者にとって負担を軽減する貴重なツールとなっています。例えば「Elicit」は、研究者が抱える具体的な質問に対し、関連する文献から大まかな回答までをおこなうAIベースのツールです。これまでは、目的に合った文献を見つけるまでに何時間も費やしていたかもしれませんが、「Elicit」を使うことで、仮説を組み立てる際や考察を述べる際の有用な素材を、効率的に集めることができます。また、「Connected Papers」は特定の研究分野内で重要な論文や、それらがどのように互いに関連しているかを視覚的に探ることができるデジタルツールです。例えば新しい研究分野に踏み入れる際、研究者はどの論文が基盤となっているのか、またある研究とどのように繋がっているのかを理解する必要があります。このような時に「Connected Papers」を使えば、多くの論文とそれらの相互関係を一目で把握でき、その分野の理解を深めることができます。これらのツールを有効活用することは、今日の研究者にとって不可欠になりつつあるかもしれません。ただし、これらのツールを活用する上で最も重要な点は、AIやデジタルツールは研究プロセスをサポートする一方で、研究の質と方向性を決定するのは研究者自身であるということです。

## ChatGPTと大学

小倉 匡俊 (広報担当・北里大学)

ChatGPTに代表される生成系AIの発展は大学における教育・研究活動にも大きく影響を与えています。学生による生成系AIの利用は大学によって対応が分かれており、たとえば私の勤務する北里大学では「講義・実習・研究などの教育研究の場において、各種課題のレポート、学位論文等の作成について、チャットGPT等のAI技術を使ったサービスの利用を禁止」しており、担当教員の許可なく作成に利用した場合は不正行為としてみなすという厳しい対応を取っています。また近畿大学は「参考・相談」は可／「依存」は不可、「個人情報等を含めた質問は禁止」とする方針を出しており、東京大学は「生成系AIツールの利用を一律に禁止することはせず」「各授業における生成系AIツール利用の可否および利用する際の条件設定は、担当教員の判断に委ねています」としつつ「生成系AIツールで生成された文章をそのまま授業課題の回答とすれば、この貴重な思考過程の訓練の機会を逸することになり、長期的には当人の能力向上が損なわれます」「AIの生成物の信憑性を判断し、修正できることも今後社会を生きていく上で重要な能力です」という解説も付しています。学生による生成系AIの利用を検知する仕組みに限界がある以上は一律禁止とする本学の対応も現実的であると理解できます。一方で、今後のさらなる技術発展も視野に入れた生成系AIの社会への浸透を考えると適切な利用を促す近畿大学や東京大学の指針が理想的だろうとも思います。個別の教員レベルや授業レベルでも生成系AIの有効な活用法を模索していくべきでしょう。

北里大学.「教育研究におけるChat(チャット)GPT等の利用について(通知)」2023年4月14日公開。

<https://www.kitasato-u.ac.jp/jp/news/20230414-05.html>

近畿大学.「生成系AI(ChatGPT、BingAIなど)の利活用について」2023年5月2日公開。

<https://www.kindai.ac.jp/news-pr/important/2023/05/038764.html>

東京大学.「東京大学の学生の皆さんへ: AIツールの授業における利用について(ver. 1.0)」2023年

5月26日公開. <https://utelecon.adm.u-tokyo.ac.jp/docs/ai-tools-in-classes-students>

# 書籍紹介

## 「動物行動図説」の改訂版が発売されました！

戸澤 あきつ (広報担当・帝京科学大学)

当学会が編集担当となり、「動物行動図説」が13年ぶりに改訂されました。多くの当学会会員が執筆に関わっています。今回の改訂の大きなポイントとしては実験動物と、数種類の展示動物の行動が加わった点です。また、導入部分「動物行動学と応用動物行動」では行動学とアニマルウェルフェアの関係や、産業動物・伴侶動物・展示動物・実験動物の特殊性についての説明が加わっています。「行動調査の方法」も情報や手法が更新されています。もちろん、各動物の行動の説明と写真も多く掲載されています。学生も、研究者も、現場で働いている方も、動物と関わり、彼らの行動を理解するためには必須の1冊となっています。



今回はカラー写真の表紙になりました！  
下は前版です。ぜひ中身の違いを比べてみてください。

### 編集後記

萩原 慎太郎 (福山市立動物園)

ニュースレター12号の発刊が遅くなり、大変申し訳ありませんでした。執筆いただきました方々には、感謝申し上げます。今後も依頼がありましたら、ご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。

表紙は、ボタンインコとケープハイラックスの混合展示で、上から巣材を取るためにやってきたボタンインコが落としかしの葉を食べるハイラックスの構図です。資源の利用や共に生きる(共生)という部分での飼育下の研究は面白そうですね。

その他、記事にして欲しい内容などがありましたら、萩原 ([hagiwara\\_s@animbehav-tokai.com](mailto:hagiwara_s@animbehav-tokai.com)) までよろしくお願いいたします。